

●コレクション・データ

時代 弥生時代 前期
調査 唐古・鍵遺跡 第33次調査
発見年 1987年
大きさ 長さ9cm、緊縛径1.5cm
展示位置 第1室・「弥生の食」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 42

穂首刈りを示す穂束

唐古・鍵考古学
ミュージアム
【 ☎ 34・7100 】

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金/15歳以下は無料）
▼大人 200円（150円）
▼高校生・大学生 100円（50円）

今回紹介する資料は、唐古・鍵ムラの環濠が成立する以前の弥生時代前期、ムラ南端の低湿地から出土したものです。穂束は、水分を含んだ緻密な粘土でパックされていたことや炭化していたことが幸いして、当時の状況のまま残ったようです。1ミも満たない稲の茎を何十本と束ね、稲わらでぐるぐる巻きにしつかりと縛っています。残念ながら、稲穂は残存していませんが、茎の太さから穂ちかくの部分と縛って保管していたことが分かります。このことは、弥生時代の稲が石庖丁による穂首刈りであったことを裏付ける資料として重要な価値をもちます。

今、弥生時代後期以降に徐々に進んだと推定されます。ところで唐古・鍵遺跡の第11次調査でも、籾の痕跡4ヶ所を残す推定復元長20センチの穂束が出土しています。穂の部分は10センチほどであったと推定されていますから、現在の稲穂が30センチ前後であることを考えるとかなり貧弱であることが分かります。また一株の米粒の数を比較すると、前者を930粒、後者を2400粒とする試算があり、弥生時代の収穫量は大変少なかったことが想像されます。

米作りが始まった弥生時代から、現代と同じように稲穂の稔る風景が広がっていたと思われるがちですが、現在に比べるとお米の生産性は、かなり低かったと推定されます。

今回の資料は、一見、真っ黒な植物の茎の束ですが、稲の生産性や稲穂の管理の仕方、稲わらの利用など多くの視点を提供してくれそうです。